# レゴ® シリアスプレイ®（LSP）メソッドを活用した ジェンダー平等への意識啓発に関する考察

The consideration on raise awareness
for gender equality with the LEGO® Serious Play® method

下田　泰奈・牛房　義明
Yasuna SHIMODA, Yoshiaki USHIFUSA

**要　旨**

ジェンダー平等および男女共同参画の実現に向けて、世界的にさまざまな取り組みが行われている中、日本国内でもその重要性が注視されて久しい。その一方、日本におけるジェンダー・ギャップ指数は依然として低い順位にあり、他の先進国と比較しても低いレベルである。本研究では、ジェンダー問題の中でも、性別による「無意識の思い込み（アンコンシャス・バイアス）」に着目してアンケート調査を行った。本研究では、レゴ®ブロックを使用した対話型ワークショップ実施前と実施後に参加者にアンケート調査を行い、アンコンシャス・バイアスに対する意識に変化が現れるか否か考察する。

＜**キーワード**＞**:** ジェンダー平等、無意識の思い込み（アンコンシャス・バイアス）、
対話型ワークショップ、SDGs

## 1．はじめに

### 1 - 1．背景と目的

2021年3月、世界経済フォーラムが、「The Global Gender Gap Report 2021」を公表し、各国における男女格差を測るジェンダーギャップ指数を発表した。2021年の国別総合スコアは、1位のアイスランドが0.892であるのに対し、120位の日本は0.656を示し、102位の韓国や107位の中国といった近隣国と比較しても、低いレベルにある。「経済」「政治」「教育」「健康」の4分野のうち、日本は特に、「経済」及び「政治」における順位が低いことが示された。ジェンダー平等の重要性は、「持続可能な開発目標（SDGs：Sustainable Development Goals）」のうち、目標5「ジェンダー平等を実現しよう」にも明示されており、各国でさまざまな取り組みが行われている。各国のSDGsの達成度・進捗状況を示す「Sustainable Development Report 2022」において、日本は163カ国中19位にランクイ

ンしているが、目標5については、「適度に改善している（Moderately improving）が、主要な課題（Major challenges)」と評価されている。

上記のように、日本においてジェンダー平等の達成が進まない要因はどこにあるのだろうか。本稿では、ジェンダー平等達成を妨げる要因の一つと言われている「無意識の思い込み（以下、アンコンシャス・バイアス)」に着目する。言語化しにくい課題を検討する際に有効な手法としてレゴ®ブロックを活用し、ジェンダー問題を可視化するワークショップを行うことで、ジェンダー問題に対する人々の考え方、行動の変化をアンケート調査を用いて把握することを試みる。

## 1-2．ジェンダー問題とアンコンシャス・バイアス

内閣府発行の広報誌「共同参画」2021年度5月号を参照すると、内閣府男女共同参画局総務課は、日本において男女共同参画実現の進展が未だ十分でない要因の一つとして、社会全体において固定的な性別役割分担意識や、アンコンシャス・バイアスが存在していることを挙げている。アンコンシャス・バイアスに関しては、令和2年（2020年）12月25日に閣議決定された「第5次男女共同参画基本計画〜すべての女性が輝く令和の社会へ〜」の中でも明言されており、政治分野、経済分野における様々な課題と並列して、我が国における取組の進展が未だ十分でない要因の一つとして記載されている。例えば、地方出身の若い女性が、東京で暮らし始めた目的や理由として、進学や就職だけでなく、地方では、固定的な性別役割分担意識や性差に対する偏見、アンコンシャス・バイアスが根強く存在しており女性の居場所と出番を奪っていることや、地方の企業経営者や管理職等の理解が足りず、女性にとって働きにくい環境であること、女性も男性も問題意識を持ちながらも具体的な行動変容に至っていないことなどが一例として挙げられている。

性別に関するアンコンシャス・バイアスについては、世界ですでに多数の先行研究が行われている。Bohnet（2018年）から一例を挙げると、1970年代後半、アメリカの5大オーケストラでは女性演奏家の割合がわずか5%にすぎなかった。現在では、一流オーケストラに占める女性演奏家の割合は35%以上だが、この変化は、「ブラインド・オーディション」が導入されてはじめて実現した。演奏家の採用試験で、審査員と演奏家の間をカーテンなどで隔てて、誰が演奏しているか審査員に見えないようにするやり方を採用したところ、女性演奏家が次の段階に進む確率は1.5倍上昇し、最終的に採用される割合も飛躍的に増えたと述べられている。

日本でも、アンコンシャス・バイアスに関する研究は教育社会学や医療分野などにおいて多数ある。苅田（2018）は、アンコンシャス・バイアスとは、誰もが潜在的に持っている「無意識の偏見」のことであり、無自覚のうちに持つようになった物事への見方や考え方のことと記載している。アンコンシャス・バイアスによる弊害として、たとえば、先入観により「女性はこまやかな心遣いができる」と期待されることがあり、その期待に添わないと、裏切られたという思いによる反動で、女性に対する評価が厳しくなることが多い、といった事例を示し、自らの過信を振り返り、決めつけや好みでより良い選択肢を見逃していないかと常に意識することが大切であると、指摘している。また、河野（2021）は、科学技術分野のジェンダー平等を実現するために、学校教育ができることを、理数系教育に着目して多角的に議論した。日本の学校は、ジェンダー視点の理数系教育に関して啓蒙段階にあり、学校教育のあり方自体にジェンダー主流化が組込まれる必要があると総括している。また、安達（2022）は、若者のキャリア形成とジェンダーについて社会正義の立場から論考し、現代の日本社会にはジェンダーによる分離の壁が残されており、物理的な壁も心理社会的な壁も、個人の仕事の選択や将来設計、そして社会に出た後の働き方にまで関わりをもつという現状を指摘した。

ここで、本稿において参照した、内閣府男女共同参画局が実施した「令和3年度性別による無意識の思い込み（アンコンシャス・バイアス）に関する調査」について記載する。この調査では、全国男女20～60代の10,330人を対象に、アンコンシャス・バイアスの認知状況や、家庭・コミュニティ領域と職場領域での性別役割、その他性別に基づく思い込みの36項目について、回答者自身の考えにあてはまるかどうか質問し、その後、性別に基づく役割や思い込みを決めつけられた経験について、インターネット調査を行った。本調査の結果を一部紹介すると、「女性には女性らしい感性があるものだ」「男性は仕事をして家計を支えるべきだ」といった性別役割に対する考えは、男性では50%以上、女性では47%以上の回答者が、「そう思う」もしくは「どちらかといえばそう思う」と回答している。この調査を通して、異性に対する思い込みだけでなく、男性・女性自身も無意識のうちに自身で（異性より）強く思い込んでいることもあるといった事例が示された。

### 1 - 3．研究方法

今回、アンコンシャス・バイアスの存在を認識し、改善する方法として、レゴ®シリアスプレイ®（LEGO® Serious Play®、以下LSP）というワークショップ手法を採用した。LSPとは、

2000年代の初めに、ロバート・ラスムセン氏が中心となって開発されたワークショップの一手法である。ワークショップへの参加者は、専門の認定ファシリテーターの進行の元、子どもの玩具として世界的に有名なレゴ®ブロック（以下、レゴブロック）を介して、自身の考えを表現し、他者と対話することで、自分自身の考えやアイディアを深めることが可能になると言われており、各国の企業や大学等の組織で活用されている。今回、ジェンダー課題をテーマにLSPを行った。ジェンダー課題という、言葉で説明しにくい概念や事柄について、レゴブロックを通して可視化し、他者に説明することで、参加者自身の考えの整理の一助になると考え、採用した。また、自分自身でも気づきにくいアンコンシャス・バイアスの存在について認識し、理解を深めてもらうために、LSPへの参加前と参加後に、アンコンシャス・バイアスに関するアンケート調査に回答してもらい、回答内容に変化が起きるか調査した。

LSPについては、いくつかの学術的研究が提出されている。Alison（2013）は、LSPは学習を振り返るための多感覚的アプローチを支持し、書くことと並行して、もしくは書く代わりに個人の成長と主題の理解を促進することを示唆した。聞間ら（2018）は、社会人を対象としたプログラムにおいてLSPを活用し、受講者の内面の成長や学修の効果について、事前と事後のレゴモデルを比較し、どのような変化が見られたかを分析した。また、石井ら（2022）は、LSPを用いて、保育者養成校における学生の内面から保育観を導出することを試みた。創作された作品およびそれに対する語りから、養成校での学びや実習先での経験を踏まえて経験されつつある保育観が一定程度明らかになったと考察している。また、下田ら（2022）は、大学生を対象とした自己分析にLSPを活用し、紙面による自己分析では漠然としていた考えが、レゴブロックを介したコミュニケーションで可視化され、客観的に示されることを示唆した。

本稿では、「ジェンダー平等」をテーマにLSPを行い、そのワークショップ前後において、アンコンシャス・バイアスに対する個人の意識が変化するか否か、アンケート調査を行って検証した。LSPを通して、言語化が難しい課題を可視化することで、自身でも自覚することが難しい概念や考えが整理され、アンコンシャス・バイアスに対する認識に変化が現れるのではないだろうか。以下、「SDGs公開講座」及び「ジェンダー平等啓発イベント」の二回において行ったアンケート調査の詳細を記す。

## ２．アンケート調査

### ２-１．アンケート調査１（SDGs公開講座）

#### ２-１-１．アンケート調査１の概要

「2022年度北九州市立大学公開講座」は2022年５月から７月にかけて数回にわたって行われ、各講座担当講師による、SDGsに関する総論や、担当講師の研究領域等と関係する各ゴールの詳細な講義が行われた。

そのうち、以下の日程において、SDGs5番「ジェンダー平等を実現しよう」をテーマに、参加者に対して、アンケート調査及びLSPワークショップを行った。

実施日時、受講者及びアンケート回答者の属性は以下の通り。

| | |
|---|---|
| 日時 | 2022年6月2日（木） |
| 人数（世代） | 20名（10代） |
| 居住地 | 市内：17名、市外：2名、無回答：1名 |
| 性別 | 男性：6名、女性：12名、無回答：2名 |

上記2022年６月２日（木）の日程の回については、「LEGOブロックでSDGsを考える」というタイトルで、事前に「当講座はLEGOブロックを活用したワークショップ形式となります」と広報資料に記載したのみで、募集を行った。

当日集まった参加者に、事前アンケートとして、講座が始まる前に、アンコンシャス・バイアスに関するいくつかの質問に回答を依頼した。なお、事前アンケートでは回答者の学年の記載を依頼したが、参加者は全員10代であったため、世代を10代として記載する。また、事前アンケートの質問項目については、先に紹介した「令和３年度　性別による無意識の思い込み（アンコンシャス・バイアス）に関する調査研究」の質問項目を参考に、アンコンシャス・バイアスという言葉の認知状況や、「家事・育児は女性がするべきだ」「男性は仕事をして家計を支えるべきだ」といった項目に、自身の考えが当てはまるか否か、４段階で評価してもらった。事前アンケートの詳細は、付録１に掲載する。

この事前アンケートの回答の後、SDGs5番「ジェンダー平等を実現しよう」の概要、ジェンダー課題に関する日本の現状、他国の事例、北九州市の取り組みといった内容で講義を行った。また、固定的性別役割分担意識や、アンコンシャス・バイアス、性の多様性といった内容にも触れ、ジェンダー課題の概要を解説した。

上記を踏まえて、その後のLSPでは、ジェンダー平等に関して、以下の問いについて、レゴブロックでそれぞれの考えを示し、他者に説明するというワークショップを体験して

もらった。なお、参加者には、「スキルビルディング」と呼ばれる、レゴブロックを使っての表現に慣れることを目的としたプロセスを経た上で、以下の質問について、各自の考えについて、ブロックを使って表現してもらった。

・日本において「何が」男女共同参画の推進を妨げていると思うか？
・SDGs5番達成（ジェンダー平等）のために「わたし」ができることとは？

講義及びLSPワークショップの終了後、参加者に事後アンケートとして、「ジェンダー平等に関する意識や行動に変化はありそうですか？」といった質問や、再度、アンコンシャス・バイアスに関する項目について、自身の考えが当てはまるか否か、4段階で評価してもらった。事後アンケートの詳細は、付録2に掲載する。

なお、事前アンケートおよび事後アンケートは各1枚ずつセット組を行った状態で配布し、個人は特定されないものの、同一人物の事前事後の回答内容が把握できる形で回収を行った。

また、LSPは、より公平性を保つため、LSPファシリテーター認定資格を有する2名（筆者含む）で行った。

**写真1. 実際のLSPワークショップの様子**

2-1-2．アンケート調査1の結果

まず、事前アンケートの結果から集計した、「ジェンダー平等に関連して、「アンコンシャス・バイアス」という言葉を聞いたことがありますか？」という質問に対する回答結果を図1に示す。

アンコンシャス・バイアスという言葉を聞いたことがある回答者は全体の10%に留まり、90%は聞いたことがない、という回答結果だった。

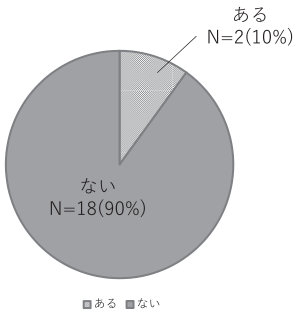


**図 1. アンケート調査 1 における事前アンケート**

「ジェンダー平等に関連して、「アンコンシャス・バイアス」という言葉を聞いたことがありますか？」
という問いに対する回答結果（N=20）

また、事後アンケートで集計した、「今回の講座を経て、ジェンダー平等に関する意識や行動に変化はありそうですか？」という問いに対する回答結果を図2に示す。

全体の95%にあたる19名から、「強くそう思う」もしくは、「そう思う」という回答が得られ、今回の講座が参加者の意識啓発の一助になったことが示された。

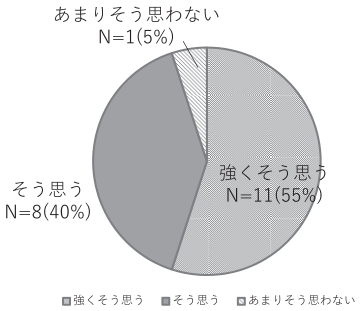


**図 2. アンケート調査 1 における事後アンケート**

「今回の講座を経て、ジェンダー平等に関する意識や行動に変化はありそうですか？」
という問いに対する回答結果（N=20）

また、事前アンケート及び、事後アンケートにて、各参加者にアンコンシャス・バイアスに関する8個の質問について回答を依頼した。なお、回答状況を数値化するために、4段階の回答について、「そう思う」を4点、「そう思わない」を1点と定義して集計し、各質問項目に対する回答の平均値をとった。結果を図3に示す。

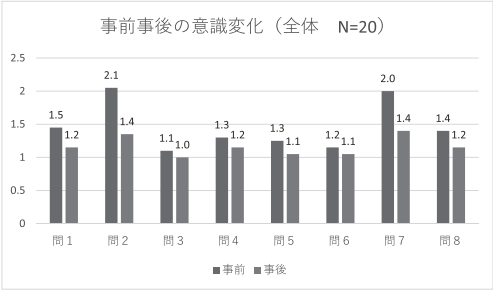


**図 3. アンケート調査 1 におけるアンコンシャス・バイアスに関する質問に対する LSP ワークショップ事前事後での意識変化比較（全体）**

同様の集計を、男女いずれかの性別の回答があった回答者についてのみ、男女別に集計した。結果を図4に示す。

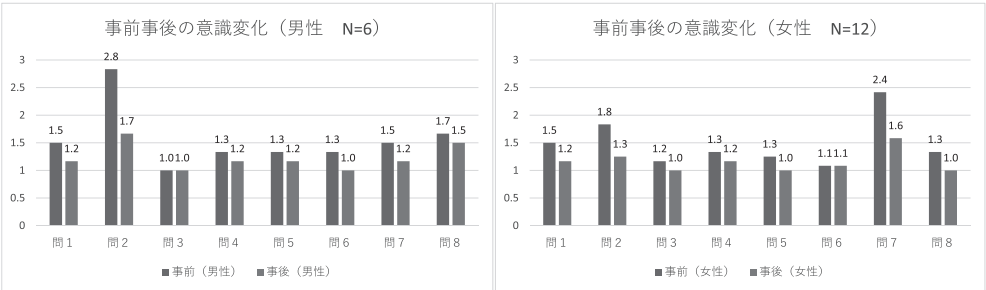


**図 4. アンケート調査 1 におけるアンコンシャス・バイアスに関する質問に対する LSP ワークショップ事前事後での意識変化比較（男女別）**

アンケート調査1において、回答者全体の結果を見ると（図3）、問2「男性は仕事をして家計を支えるべきだ」では、2.1から1.4（差0.7）へ、問7「女性は感情的になりやすい」については、2.0から1.4(差0.6)へ数値が変化し、比較的顕著な事前事後の意識変化があった。

男女別の回答状況（図4）を比較すると、問2については男性で2.8から1.7（差1.1）へ、問7については女性で2.4から1.6（差0.8）へ数値が変化したことが示された。

## 2-2．アンケート調査2（ジェンダー平等啓発イベント）

### 2-2-1．アンケート調査2の概要

次に、2022年7月に行われたジェンダー平等啓発イベントにおいて、アンケート調査1と同様のアンケート調査を行った。当イベントは、「ジェンダー課題」について考えること

を目的として、市内の高校生向けに参加が呼び掛けられ、そのキックオフイベントにおいて、LSPを活用したワークショップを行った。
実施日時、受講者及びアンケート回答者の属性は以下の通り。

| | |
|---|---|
| 日時 | 2022年7月16日（土） |
| 人数（世代） | 20名（10代） |
| 居住地 | 市内：18名、市外：1名、無回答：1名 |
| 性別 | 男性：6名、女性：12名、その他：1名、無回答：1名 |

アンケート調査1のときと同様、参加者には、講座が始まる直前に、事前アンケートとして、付録1の質問項目への回答を依頼した。

なお、本イベントでは、参加者募集の段階から「ジェンダー課題」をテーマに行うことが周知されていたため、当日はジェンダー課題の背景や現状といった講義内容は割愛した。事前アンケートの回答の後、その後のLSPでは、ジェンダー平等に関して以下の問いについて、レゴブロックでそれぞれの考えを示し、他者に説明するというワークショップを体験してもらった。なお、アンケート調査2においても、参加者には、「スキルビルディング」と呼ばれる、レゴブロックを使っての表現に慣れることを目的としたプロセスを経た上で、以下の質問について、各自の考えについて、ブロックを使って表現してもらった。

・あなたの思うジェンダー問題における「課題」とは？
・さきほどの課題のために、「わたし」ができることとは？

LSPワークショップの終了後、参加者に事後アンケートとして、付録2の質問項目に回答してもらった。

なお、アンケート調査2においても、事前アンケートおよび事後アンケートは各1枚ずつセット組を行った状態で配布し、個人は特定されないものの、同一人物の事前事後の回答内容が把握できる形で回収を行った。

また、LSPはより公平性を保つため、LSPファシリテーター認定資格を有する2名（筆者含む）で行った。

### ２-２-２．アンケート調査2の結果

まず、事前アンケートの結果から集計した、「ジェンダー平等に関連して、「アンコンシャ

ス・バイアス」という言葉を聞いたことがありますか？」という質問に対する回答結果を図5に示す。

アンコンシャス・バイアスという言葉を聞いたことがある回答者は全体の25%を占め、70%が聞いたことがない、という回答結果だった。

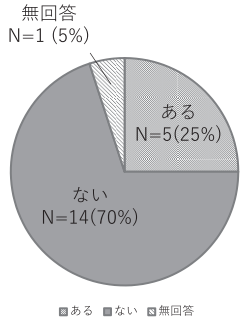


**図 5. アンケート調査 2 における事前アンケート**

「ジェンダー平等に関連して、「アンコンシャス・バイアス」という言葉を聞いたことがありますか？」という問いに対する回答結果（N=20）

また、事後アンケートで集計した、「今回の講座を経て、ジェンダー平等に関する意識や行動に変化はありそうですか？」という問いに対する回答結果を図6に示す。

全体の90%にあたる18名から、「強くそう思う」もしくは、「そう思う」という回答が得られ、アンケート調査1のときと同様、今回の講座が意識啓発の一助になったことが示された。

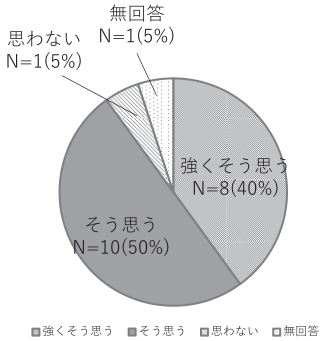


**図 6. アンケート調査 2 における事後アンケート**

「今回の講座を経て、ジェンダー平等に関する意識や行動に変化はありそうですか？」という問いに対する回答結果（N=20）

また、事前アンケート及び、事後アンケートにて、各参加者に「アンコンシャス・バイアス」に関する8個の質問について回答を依頼した。なお、回答状況を数値化するために、4段階

の回答について、「そう思う」を4点、「そう思わない」を1点と定義して集計し、各質問項目に対する回答の平均値をとった。結果を図7に示す。

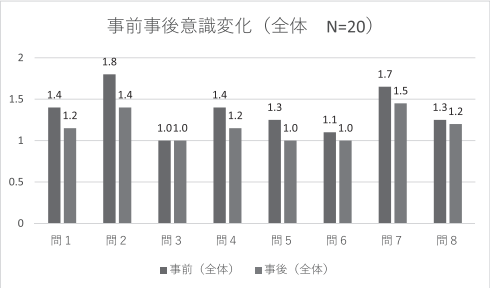


**図 7. アンケート調査 2 におけるアンコンシャス・バイアスに関する質問に対する LSP ワークショップ事前事後での意識変化比較（全体）**

同様の集計を、男女いずれかの性別の回答があった回答者についてのみ、男女別に集計した。結果を図8に示す。

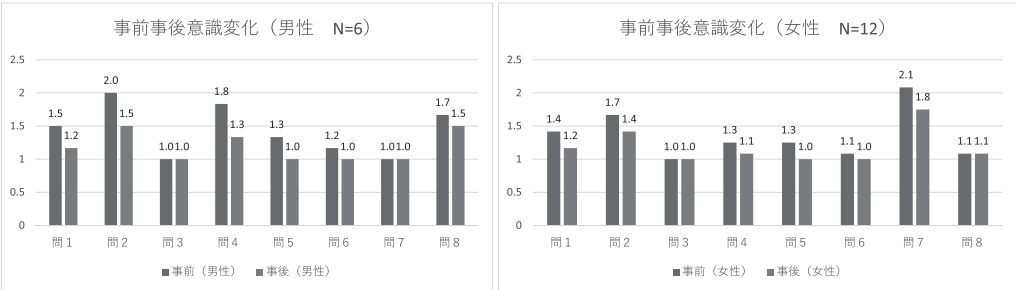


**図 8. アンケート調査 2 におけるアンコンシャス・バイアスに関する質問に対する LSP ワークショップ事前事後での意識変化比較（男女別）**

アンケート調査2において、回答者全体の結果を見ると（図7）、問2「男性は仕事をして家計を支えるべきだ」について1.8から1.4（差0.4）へ、問5「組織のリーダーは男性の方が向いている」について、1.3から1.0（差0.3）への変化があったものの、質問項目の違いによって、事前事後で顕著な差があるものは見られなかった。

男女別の回答状況（図8）を比較すると、男性については、問2「男性は仕事をして家計を支えるべきだ」では2.0から1.5（差0.5）へ、問4「男性であればいい大学を出て出世を目指すべきだ」では1.8から1.3（差0.5）への変化、女性については、問2「男性は仕事をして家計を支えるべきだ」では1.7から1.4（差0.3）へ、問5「組織のリーダーは男性の方

が向いている」では1.3から1.0（差0.3）、問7「女性は感情的になりやすい」では2.1から1.8（差0.3）へ数値が変化したことが示された。

## 3．考察

ここでは、アンケート調査1とアンケート調査2の結果について、比較を行う。

まず、アンケート調査1とアンケート調査2において、受講前のアンコンシャス・バイアスの認知率は、それぞれ10%（図1）と25%（図5）である。この二つの調査間の差は、アンケート調査1の対象者がSDGsに関する一連の講座の一環の一つとして参加したのに対し、アンケート調査2の対象者については、ジェンダー課題について興味のある高校生を対象に公募したため、対象者の事前知識に違いがあったと考えられる。

また、「今回の講座を経て、ジェンダー平等に関する意識や行動に変化はありそうですか？」という問いに対して、「強くそう思う」「そう思う」という回答が、アンケート調査1では95%（図2）、アンケート調査2では90%（図6）であった。両調査において、他者とジェンダー課題について議論する機会をもったことで、事後アンケートでは、それぞれ90%以上の受講者が「講座を経て、ジェンダー平等に関する意識や行動に変化がある」と回答したと考えられる。

また、アンケート調査1の図3と図4、アンケート調査2の図7と図8を比較すると、アンケート調査1の方が事前事後での数値の変化（差）が大きいものの、両アンケート調査の各設問において、事前よりも事後の方で数値が高くなることはなかった。両調査において、ジェンダー課題について、他者と対話することで、固定的な性別役割分担意識や、アンコンシャス・バイアスと呼ばれる「思い込み」が和らぐことが示唆された。このことは、事後アンケートにおける自由回答の中にも表れた。例えば、「男女で格差をなくすためにも『女だから～』『男だから～』といった言葉を言わないように心がけられると思った」「身の回りで起こっているジェンダー問題にもっと目を向けてみようと思った」といった回答があり、定性的ではあるが、今回の講座が参加者の意識変化の一助になった可能性が示された。

次にLSPの効果について検討する。事後アンケート内の自由回答を参照すると、「LEGOを通してジェンダーについて考え、グループの人と共有したことで、偏見等で人を判断して、周りを傷つけないようにしたいと思った」「レゴブロックでジェンダー問題を表現するにあたって、今まで考えつかなかった視点から問題を見ることができた」といった回答があり、物（レゴブロック）を介してのコミュニケーションによって、自身の考えの醸成や、他者

との対話が促進される効果が伺える。言葉のみでの表現が難しい概念やアイディアについて、レゴブロックで可視化することで、他者とのコミュニケーションが促進されたと考えられる。ただ、LSPやレゴブロックを活用せずに、他の類似した参加者同士の参加型ワークショップや対話促進ツールを用いたときも同様の効果が得られる可能性はあるため、LSPやレゴブロックを用いずに、ジェンダーについて他者とコミュニケーションする機会を別途設け、今回の結果と比較する必要がある。

## 4．まとめ

今回、LSPを用いて、「ジェンダー課題」をテーマに参加者各個人の考えを可視化し、他者と対話し、アンケート調査を通してアンコンシャス・バイアスに関する意識に変化が生じるかを調査した。LSPという、課題の可視化を通して互いの考えを共有するコミュニケーションツールを用いたことで、他者とジェンダー課題について話し合い、アンコンシャス・バイアスに対する自身の思い込みが緩和されたことが示された。アンコンシャス・バイアスという、複雑かつ、生活環境や地域による影響も受けやすいと考えられる社会課題について、他者と広く意見交換することは、自分自身の先入観に気付き、自身の考えを深める機会になる。バイアス除去の取り組みについては、Bohnet（2018年）の中でも紹介されている。バイアスを除去するには、「①バイアスに影響される可能性の認識、②バイアスがはたらく方向性についての理解、③バイアスに陥った場合の素早い指摘、④頻繁なフィードバックと分析とコーチングを伴う研修の実施」という4つのステップが必要だと言われている。今回、レゴブロックを使ってジェンダー課題に対する自身の考えを表現したことで、参加者は少なくとも、アンコンシャス・バイアスの存在に気付き、その内容について検討する機会を提供した。

今回は10代に限定し、少ないサンプル数で調査したが、今後は他の世代や属性に対しても調査を行う。

＜参考文献及び資料＞

Iris Bohnet, 2018,『WORK DESIGN(ワークデザイン):行動経済学でジェンダー格差を克服する』, NTT出版株式会社

James, A. R. (2013) “Lego Serious Play: a three-dimensional approach to learning development”, *Journal of Learning Development in Higher Education,* (6). doi: 10.47408/jldhe.v0i6.208.

安達智子, 2022,「特集「キャリア教育と社会正義」若者のキャリア形成とジェンダー―社会正義からの再考―」『キャリア教育研究』40巻2号, 39-44.

石井由依・近藤雄大・矢幅照幸・崎田嘉寛, 2022,「保育者養成課程における「教育課程論」の授業スタイルに関する一考察―レゴ@シリアスプレイ@による保育観の可視化を通じて―」『帯広大谷短期大学紀要』2022年59巻, 1-10.

河野銀子, 2021,「理数系教育とジェンダー ―学校教育にできること―科学技術政策とジェンダー――学校教育への注目」『学術の動向』26巻7号, 10-16.

苅田香苗, 2018,「アンコンシャス・バイアスという見えない壁」『日本健康学会誌』84巻3号, 79-80.

聞間理・森田健・岸智子・西田武司, 2018,「レゴ®シリアスプレイ®(LSP)メソッドを活用したプロジェクト・ベースト・ラーニングにおける自己成長と変化の測定」『九州産業大学経営学論集』第28巻 第4号, 53-72.

下田泰奈・大田真彦, 2022,「レゴ®シリアスプレイ®（LSP）メソッドを活用した多角的な自己分析」『北九州市立大学 地域創生学群『地域創生学研究』第5号』123-134.

Global Gender Gap Report 2021 INSIGHT REPORT MARCH 2021
https://www3.weforum.org/docs/WEF_GGGR_2021.pdf（最終閲覧日2022年9月22日）

UNESCO, 2017, Education for Sustainable Development Goals: Learning objectives.
https://www.unesco.de/sites/default/files/2018-08/unesco_education_for_sustainable_development_goals.pdf（最終閲覧日2022年9月16日）

Cambridge University Press, 2022, Sustainable Development Report 2022
https://s3.amazonaws.com/sustainabledevelopment.report/2022/2022-sustainable-development-report.pdf（最終閲覧日2022年9月16日）

男女共同参画の総合情報誌　内閣府編集広報誌「共同参画」第144号：2021年度5月号
https://www.gender.go.jp/public/kyodosankaku/2021/202105/pdf/202105.pdf（最終閲覧日2022年9月17日）

男女共同参画局　第5次男女共同参画基本計画～すべての女性が輝く令和の社会へ～（令和2年12月25日閣議決定）
https://www.gender.go.jp/about_danjo/basic_plans/5th/pdf/print.pdf（最終閲覧日2022年9月17日）

男女共同参画局　令和3年度　性別による無意識の思い込み（アンコンシャス・バイアス）に関する調査研究
https://www.gender.go.jp/research/kenkyu/seibetsu_r03.html（最終閲覧日2022年9月16日）

## 付録１　アンケート調査１とアンケート２調査で行った事前アンケート票

**【事前アンケート】 ※講座受講前にご回答お願いします。**

差し支えない範囲で、ジェンダー研究に関する以下のアンケートにご協力いただけると幸いです。なお、回答は講座開始前にお願いします。

学年（高校1年生・高校2年生・高校3年生・その他）

お住まい（北九州市内・北九州市外）　　性別（男性・女性・その他）

ジェンダー平等に関連して、「アンコンシャス・バイアス」という言葉を聞いたことがありますか？

□ある　□ない

以下の各設問について、ご自身の考えに最もよく当てはまるものに〇を付けてください。

1. 家事・育児は女性がするべきだ

そう思う / どちらかといえばそう思う / どちらかといえばそう思わない / そう思わない

2. 男性は仕事をして家計を支えるべきだ

そう思う / どちらかといえばそう思う / どちらかといえばそう思わない / そう思わない

3. 女性に理系の進路（学校・職業）は向いていない

そう思う / どちらかといえばそう思う / どちらかといえばそう思わない / そう思わない

4. 男性であればいい大学を出て出世を目指すべきだ

そう思う / どちらかといえばそう思う / どちらかといえばそう思わない / そう思わない

5. 組織のリーダーは男性の方が向いている

そう思う / どちらかといえばそう思う / どちらかといえばそう思わない / そう思わない

6. 職場では、女性は男性のサポートにまわるべきだ

そう思う / どちらかといえばそう思う / どちらかといえばそう思わない / そう思わない

7. 女性は感情的になりやすい

そう思う / どちらかといえばそう思う / どちらかといえばそう思わない / そう思わない

8. 男性は人前で泣くべきではない

そう思う / どちらかといえばそう思う / どちらかといえばそう思わない / そう思わない

## 付録２　アンケート調査１とアンケート２調査で行った事後アンケート票

**【事前アンケート】 ※講座終了後にご回答お願いします。**

差し支えない範囲で、ジェンダー研究に関する以下のアンケートにご協力いただけると幸いです。なお、回答は講座終了後にお願いします。

1. 今回の講座を経て、ジェンダー平等に関する意識や行動に変化はありそうですか？

□強くそう思う　□そう思う　□あまり思わない　□思わない

2. 上記設問1.にて、「強くそう思う」「そう思う」と回答した方について、

差し支えない範囲で具体的にどう変化がありそうか、教えてください。

以下の各設問について、ご自身の考えに最もよく当てはまるものに〇を付けてください。

1. 家事・育児は女性がするべきだ

そう思う / どちらかといえばそう思う / どちらかといえばそう思わない / そう思わない

2. 男性は仕事をして家計を支えるべきだ

そう思う / どちらかといえばそう思う / どちらかといえばそう思わない / そう思わない

3. 女性に理系の進路（学校・職業）は向いていない

そう思う / どちらかといえばそう思う / どちらかといえばそう思わない / そう思わない

4. 男性であればいい大学を出て出世を目指すべきだ

そう思う / どちらかといえばそう思う / どちらかといえばそう思わない / そう思わない

5. 組織のリーダーは男性の方が向いている

そう思う / どちらかといえばそう思う / どちらかといえばそう思わない / そう思わない

6. 職場では、女性は男性のサポートにまわるべきだ

そう思う / どちらかといえばそう思う / どちらかといえばそう思わない / そう思わない

7. 女性は感情的になりやすい

そう思う / どちらかといえばそう思う / どちらかといえばそう思わない / そう思わない

8. 男性は人前で泣くべきではない

そう思う / どちらかといえばそう思う / どちらかといえばそう思わない / そう思わない